

民族・メロドラマの悪役たち

——『土地』における日本（人）——

金 哲

翻訳／田島 哲夫

解説／沈 熙燦

古典的メロドラマは、モダニティーに対して、多少逆説的ではあるが、それにもかかわらず共通する二重の心理的反応を示していた。一方でメロドラマは、過酷で予測不可能な近代資本主義の物質的生に置かれた個人の無能力を劇的に表現した。もう一方では、観客たちに宇宙からより高次元の道徳的力が依然として地上を見下ろしており、究極的にはその正義の手によって世界を治めることで彼らを安心させるため、準—宗教的な改良的機能を果たした。美徳への賛美、究極的な詩的正義 Poetic justice とともに、メロドラマは人びとが近代的な生の浮き沈みに対処できるように手助けしてくれる一種の補償的な信を提供した。

ベン・シンガー『メロドラマとモダニティー』(二)

一、民族・メロドラマとしての『土地』

メロドラマについてよく整理されたある研究によれば、メロドラマとは五つの主要な構成要素が多様に結びついている一種の「概念群 cluster concept」なのだが、この五つの要素とは、①強烈なパトス、②誇張された感傷、③道徳的二極化、④非古典的ナラティヴ（すなわち、行為のエピソード的連発）、⑤スペクタクル効果である。ある演劇や映画、あるいは文学作品をメロドラマと呼ぶには、これらのうちの二つか三つ、時にはたった一つの要素だけでも充分だといえる (1)。

朴景利氏の長篇大河小説『土地』(二)に見られる日本および日本人像を検討しようとする本稿において、私はメロドラマに関するこの定義に拠りつつ、この小説を読んでみようと思う。メロドラマの構成要素のうち、とくに最初の三つの要素、すなわち強烈なパトス、

過剰な感情、道徳的二極化は、数多くの人物と広大な地域を包括するこの小説において最も目立つ特性であり、全部で五部立て一六冊(三)におよぶ長大な話を支える土台である。平沙里の大地主チエ参判の家に加えられる終わりなき苦悩と試練、また肯定的に描かれる人物たちに加えられる不当な抑圧と苦痛、そこから生成される強烈なパトスは、『土地』の舞台全体を支配している。崩壊寸前の苦痛に追いこまれていく人物たちを描写する小説の文体は、激情に溢れる語彙、悲嘆と怒りにより破裂しそうな絶叫、感嘆符(!)の氾濫する文章を限りなくほとばしる。

最も特徴的なのは、道徳的二極化である。善(人)／悪(人)という鮮明かつ仮借ない二分法は、六千八百ページを超える途方もなく長大なこの小説において不変の原則となっている。この善悪という鮮明な二極化は、意外にも、否、当然にも、量的に膨大なこの小説の内部的密度を、きわめてしまりのない無味乾燥なものとしているのだが、この二極化した世界の中で善(人)の群れは、満州の原野を駆け巡る独立闘士、地下で暗躍する革命家、それに日本(人)への強烈な敵愾心と嫌悪感を秘めた多数の民衆であり、悪(人)の群れは、少数の日本(人)と「親日派」たちである。

平和な農村平沙里の豊かな秋の収穫を祝う宴会に襲いかかる日本の軍隊と警察の残虐行為の描写から始まる『土地』の最初の場面があらかじめ示すように、すべての災難と苦痛はこの悪の群れからもたらされる。日本(人)と「親日派」は、「悪の根源」であり「絶対悪」(八―二五〇)なのである。「もし極悪非道の親日派チヨ・ジュングがチエ参判の家を乗っ取りさえしなかったなら、すべての悲劇と不幸はなかったはずであり、「日本の侵略がなかったなら」、「日

本がわれわれの山河を侵さなかったなら」、あのすべての苦難もなかったはずである。「帝國主義日本の動物的な食欲、それがどれほど多くの朝鮮の民衆の運命を変えてきたか」(一四一―一六四)。

したがって、悪辣で残忍無道の悪党たちと英雄的な超人たちの対決が『土地』の基本的な語りの文法となるのは、この二極化された善／悪の世界、メロドラマの世界においては当然のことである。このメロドラマの世界の中で究極的な勝利に向かっていく善(人)の総称は、「民族」である。「民族」や「祖国」は、善(人)の根拠であり、また終着地となる。言い換えるなら、出発点であり回帰点としての「民族」こそ、このメロドラマの真の主人公なのである。『土地』を民族・メロドラマと名づけた理由はここにある。

二、「甲虫」と「蝶」

それでは、『土地』において、「悪党」はどのように描かれているのだろうか。驚くべきことに、日本(人)が「悪の根源」「絶対悪」「魔鬼」「悪魔」などと呼ばれ、あらゆる災難の源として設定されているのに、実際に日本(人)が小説の舞台上に直接登場することはほとんどなく、小説内の事件や人物に大きな影響を与えることもない。にもかかわらず、『土地』は日本(人)と日本文化への様々な言及に満ち溢れている。まず次の場面を見てみよう。

「それでなんだけど、日本人の服やその色をどう思いますか」

「どう思っかって？」

「甲虫、カブトムシを連想しませんか」

「……？」

「逆に日本の女と結婚して彼らの中に埋もれて生きてきた身だから、朝鮮を対象にする私の目が盲目的なだけじゃないでしょう。それで、朝鮮の服とその色を考えてみたんです」

「そりゃ何だい」

「蝶、鶴です」

(中略)

「日本の服やその色は相当グロテスクです。特にその色は不透明で厚ぼったいでしょう。…服の形だって、動きがありません。…一言でいうと、複雑でグロテスクなんです。朝鮮の服とその色を考えてみましょう。九〇%以上が白で、他の色にもほとんど中間色がありません。すべて白色で透明なんです。それに、服の形は、動きがない部分がほとんどありません。線も、密着していない直線には豊かな動きを許し、密着するしかないところは曲線で処理しています。透明な笠、この笠こそ世界的な名作じゃないでしょうか。これで、甲虫あるいはカブトムシ、鶴あるいは蝶の説明になるでしょう」(二〇一—一六一)

日本帝国から貴族の爵位を受けた親日派チョ・ヨンハとその弟であるチョ・チャンハが交わす対話の中で、日本の服を「甲虫」に、朝鮮の服を「蝶、鶴」に譬えるチョ・チャンハの見方がどれほど妥当なのかは、本稿の関心事ではない。さらに、こうした民俗学的知識が実は帝国主義の支配者から伝えられたものであり、被植民者がそのような知識にもとづいて自分自身を再認識することこそが典型的な植民地主義の作動方式だという、すでに多く論じられてきたポストコロニアリズムの論法を改めて持ち出そうというのでもない。

先の引用における非論理的・自己中心的な偏見を指摘するのはとても簡単だろう。ところが、この引用文は、『土地』における他の日本(人)論に比べればまだ控えめであり、バランスのとれたものであつて、むしろ例外的だともいえる。少し長くなるが、以下の引用を見てみよう。

刃とセックス、それこそがまことに日本の数千年の歴史の真髄ではなかったか。(二〇一—一四)

私ら朝鮮人はいくらひどいといっても、三綱五倫は知つてらあ。朝鮮にやつてきた倭奴どもは、下衆にしてもあんな下衆はいないってことさ。普通の奴も、ふんどし一つ股に締めて女の前に現れるのは当たり前。山や島からやつてきた奴らは、ほんと獣とそっくりだつて言うぜ。(七—四五八)

李朝五百年の間に根を張つた三綱五倫、その倫理道徳に馴染んできた常民たちは、衣服がボロでも、礼儀礼節を知らない倭人たちを獣でも見るようにして…(七—二二九)

朝鮮をあゝの狼どもが食い散らしていた時、こぼれた残飯を求めてドブネズミの群れみたいに押し寄せてきた奴らの民、汚くて恥知らずで卑しいあの倭人ども…(七—二三〇)

日本がどうしてセックスの王国なのか。涸れてしまった泉を満たすためであり、それさえも真実であるかのように錯覚するか

らだ。……言うまでもなく、グロテスクは刀、血、怪奇であり、それは必然的にエロティシズムと結びつき、無意味な結果を生む。(一四—三二二)

三綱五倫をわきまえる朝鮮の農夫たちの目に、本土で捨てられた卑賤な日本人たちはけだものに見えた。彼らは、口にするこゝろさへ恥ずかしい野蛮人だった。(二〇—一六)

「日本の奴らの下層社会を覗いてみりゃ、おれたちの下層社会はもう両班だぜ」

「そりゃそうさ。けだものだよ」(八—四一九)

儒教思想に慣れた朝鮮の民の潜在意識のうちには、礼節と慎ましさ、あの格調高きソンビ精神の残影があっただろうし、……日本のものは低俗で稚拙に見えただろう。(二〇—一一)

刀の文化、遊郭文化、それも文化の範疇に属するのかわいしいが、ともかく日本の軍靴が通り過ぎたところに真先に確実に建つのが遊郭だ。そう言えば、刀とセックスは不可分の関係のようだし……(二三—四九)

倭風が入ってきて、そういうものが全部崩れてしまったな。けどものみたくない倭奴ども、三綱五倫も知らない世の中じゃねえか。(二〇—一四六)

人は方便で生きちゃ使えないもんだ。それは倭奴の考え方さ。

人と人とは信義だ、方便じゃ長くもたないから……(一四—二五五)

日本文化の精髓が「刃とセックス」にあると断言し、日本人を「けだもの」「野蛮人」として描くこうした言説は、『土地』の全編にわたって絶え間なく繰り返される。「朝鮮人はいくらひどいといっても、三綱五倫は身についた上品な両班」なのに対して「倭奴は汚らしく下品な野蛮人、けだもの」だ、こうした乱暴な人種主義的偏見が、韓国文学のノーベル賞受賞が話題になるたびに決まって候補に挙がりもした作家の作品に、このようにはびこっているのは驚くべきことだが、紛れもない事実である。

一方、次の引用は、『土地』において非常に多くの部分を占める無数の日本(人)論、あるいは日本文化論の一部である。

日本の特性というのは、荒唐無稽なことも真実になることで、真実に対する苦悩がないから、真の意味での思想と宗教も存在しないんだ。次元の高い文化芸術がないってことも、彼らの音楽や踊りを見ればわかる。単調な体の動き、力の爆発がないのに、刀を持つと強いんだ。(二—一一三)

日本には真実を探求する透徹した知性がない。……真実は必要に応じていつでも何のためらいもなくへこませる鍋みたいなもの、彼らには歴史意識がない。あの地には、宗教や哲学が根づかないのだ。(一四—三二五)

君主が現人神である以上、真理、真実の追究は不可能じゃないでしょうか。歴史的に常に人のものを模倣するしかなかったのは、まさにそのためなんです。日本が、刀、武器以外に作ったもの、何かありますか。(一五―二六五)

心の奥底に痛哭が、涙がなくてどうやって思索ができるでしょうか。宗教に帰依することもできないでしょう。真理を探求し、文化を形成することもできません。日本人に真の宗教がありませんか。真のイデオロギーがありますか。(一五―二七二)

クズ野郎ども、服一つ作れねえで、フン、おれたち朝鮮の普段着を持って行ったチョッパリごときに何ができるってんだ。

(五―一七〇)

昔、国の基礎を固めてやったが、無知蒙昧なもので、高句麗が送った国書も読めるのは王仁の子孫ただ一人だったとか、そんな奴らに知識を伝えてやって、竹筒に飯を盛って食べていた奴らに焼き物を教え、仏像を海に浮かべて送ってやって、そうやって芸術を伝授してやったのに、おれたちが今あいつらに野蠻族だと罵倒されている。(一三―一七〇)

クソツ！器がなくて竹筒に飯を盛って食べていた倭奴が、壬辰倭乱の時に陶工を連れて行ったことは知らないのか、殺しても飽き足りない奴ら。あの口ばしでもって、エジプトのピラミッドがどうのスフィンクスがどうのと……(一〇―三〇一)

奴らこそ無知蒙昧な野蠻族で、悠久なる我が文化の洗礼を受けて目を開いたんじゃないか。(二六―七九)

おたくらの貧しい文化を支えたのは、少数のロマンチスト、しかし創造の面でそれは次元が低いですよ。……宗教の中から一つ、仏教を挙げてみましょう。綺羅星のような高僧たち、燦々たる仏教文化、今もその前例は海辺の貝殻みたいにいたるところに転がっている。おたくらの国は？日蓮？空海？坊さんはそれぐらいしか数えられないけど、彼らが何をしましたか。経典をもらって帰り、国難内襲を叫んだだけ、……おたくらは団結を成し遂げた。腹いっぱい豚になったんですよ。(一〇―一〇五)

日本は強国だ、老大国清とロシアに挑戦し、勝利した強国。この強国という観念は、彼らの貧弱でみすぼらしい文化まで格上げしたんです。下品で粗雑な文化が偉大に見え始めた、というわけです。(二〇―三〇〇)

朝鮮からもらい、奪っていき、際限なく持って行っても、土台が貧困だから省略するしかなかった日本の稚拙な単純さ、豊かな土台での省略とはおそろしい差ですよ。私の言うこと間違ってます？壬辰倭乱の時に大勢の陶工を連れていったのもそうだし、遠い昔から朝鮮の磁器に狂ったように夢中になったのは、それを作ることができない文化的な貧困、つまり精神的な貧困から来たことじゃありませんか。そうじゃありませんか？(一

注目すべきなのは、これらの言説の多様性ではなく、むしろその同一性である。それぞれ異なる人物が発しているにもかかわらず、日本（人）と日本文化に対する彼らの発言の内容は、すべて同様である。同じ内容が異なる人物の口を通して、または話者の直接の語りを通して、ひっきりなしに繰り返される。日本には宗教も、思想も、哲学も、文化も、芸術もない。日本の文化や芸術は、低俗で貧困だし下品で粗雑だ。あるのは刀とセックスだけだ。日本（人）と日本文化を「野蛮人」や「けだもの」と罵倒し軽蔑する（そしておそらくそこから心理的快感を得る）この視線は、『土地』の全編にわたって絶え間なく続く。要するに、あふれ返る日本（人）論にもかかわらず、「日本はない」^{二〇}。自己と他者の関係を文明／野蛮という構図によって設定することこそ帝国主義支配の礎なのだという認識は、もちろんこの世界では生まれる余地がない。言うまでもなく、帝国主義を乗り越える想像力も、この中では決して期待できない。

三、「根絶やしにせねば」

さらに問題なのは、先に挙げたような日本文化論が、かろうじて維持していた術学的なうわべさえ完全に投げ捨てて日本（人）を描写する時である。「悪党＝日本（人）」への呪詛、憎悪、嫌悪、軽蔑の情緒と言語は、『土地』におけるすべての登場人物が共有するものである。作家は、語りの展開とは何の関係もない日本人たちをエピソードとして時折登場させるのだが、その際の描写はほとんど例外なく次のとおりである。

「お前、倭奴どもはタネが小さいの知らねえのか？自分より小さいのがあるつてのは、なかなか悪くない」

（中略）

「倭奴どもだよ、倭奴どものことだが、どう見える？」

「人のツラしてるのは同じでしょう」

「みんな湯気がほかほかの焼きイモみたいに見えんか？」

「焼きイモだったらどんなにいいでしょう。腹が破裂するとしても全部食い尽くしますよ」

「だったら、暖かくて貴重品を隠すのにもいい腹巻きだったらどうだい」

「みんながですか？ そんなことはないでしょう。兵児帯に信玄袋をしょった老いばれはどうですか。目に目ヤニがこびりついて、がたがた震えているざまときたら、乞食の中の乞食、あつ、あそこを見てください。ふくらはぎをさらけ出している女です。チョッパリの女ですよ」（八一―〇九）

社会主義者であり透徹した独立闘士であるソ・イドンとその後輩とが交わす対話がこれである。また、満洲龍井の朝鮮人学校の教師で熱烈な民族主義者として独立運動にたずさわっているソン・チャンファンが、道端で偶然日本人たちと会う別の場面を見てみよう。

彼らの前を、杖を突いた一人の日本人の老人が歩いていく。鼠色の一重を着て、下半身は両端を下から捲し上げて黒い帯の間に差し込んでいるため、脛はおるか尻もぎりぎり、草鞋を履いた年寄り、背中に荷を一つ背負っていた。

「きゃあ！犬みたいな奴、気持ち悪い」

男のむき出しの脛を見て仰天した一人の婦人がすばやく道をあける。

「あの老いばれは一体何だというんでここまでやってきたんだろう」

ソン・チャンファンがつぶやいた。

「せがれのところにも行くんだろ。出で立ちを見れば、罪のない百姓のようだ」

「そうかな。おれの目には飢えた老獣に見える」

ソン・チャンファンは道端にペツと唾を吐いた。(四―一三八)

通りで偶然見かけた日本人（それもみずばらしい乞食のような格好をした日本人の老人）に対する知識人たちの言語と行動のうちにあるこの「野蛮な」ゼノフォビア (Xenophobia) は、『土地』の世界では、決して例外でも特別でもない。「ウエノム (倭奴)、ウエニヨン (倭女)、ウエホンビョン (倭憲兵)、ウエマル (倭言葉)、ウエジョンジャ (倭種子)、ウエチエク (倭冊)、ウエトン (倭銭)、ウエキーセン (倭妓生Ⅱ芸者)、ウエソリパン (倭レコード)」といった卑称は登場人物だけでなく、作家の地の文でもよく用いられるが、「親日派や知識人ではなく」「朝鮮の大地であり生命」である「大多数の民草は、倭奴、倭女と言ひ」、それは「歴史的な自負心」の表現だ、というのが作者の主張である(一四―九二)。では、「倭奴」とは何者か。「相手が弱そうならその邪悪さは蛇のごとく狼のごとく暴虐になるが、相手が強そうなら瞬く間に子鼠に豹変する習性」を持つのが「倭奴」である(二二―三一九)。「毒キノコ」(九―一八七)

のような存在である「親日派」、「民族叛逆者」も同じである。「倭奴」の下でへつらつて生きている連中は、相手が弱そうなら踏みじろうとし、勢力がありそうならうわべでも優待する癖(七―三〇五)がある。

『土地』の日本(人)描写が三流通俗劇の陳腐でお決まりの想像力の範囲を越えられないのは、とりわけこの「悪党ども」の容貌を描写する時である。「下駄を履いて内股で歩きながら、地面に落ちた小銭を探すように下を見て歩く彼らの習性」(二二―五五)は、「男女を問わず下着を身に着けないこと」(八―四〇七)とともに、強い嫌悪感を抱かせるものである。晋州ES女子高の日本人教師を描写する次の場面は、日本(人)に対する嫌悪の情緒がこの作家の筆と想像力をいかに制約しているかをよく示している。

出っ歯に髪がへばりついた額、上に持ち上がった両肩を深く折り曲げて内股で歩き、両手は案山子のようにだらりと垂れ下がりに、顔にはいつも人を、特に朝鮮人を見下す表情を浮かべ、授業時間には朝鮮人への悪口をためらわなかった岩崎先生、砂糖を持つて来たら点数を甘くしてやる、出っ歯と真つ赤な歯茎をむき出しにして笑っていた美術の先生、やはり出っ歯で体は小さく背も低く、眼鏡をかけていた音楽の先生は、いつも人のいい笑いを浮かべていたが、雀の涙ほどの同情心もない傍観者だった。そして、センチメンタリストの体育の先生、こうやって語り終えてみると、容貌は出っ歯がとても多い。(一六―三二一)

「悪党は容貌が醜くて不細工だ」（当然善人は「きれいだ」ということは、このメロドラマにおいて徹底的に守られる語りの原理である。日本人や親日派は、その道徳的墮落にふさわしく、浅はかで卑しい容貌で描かれる。すべての災難をもたらした親日派の悪党チヨ・ジュングは「豚のように肥えて背が低い」し、女密偵ペ・ソルジャの外貌は「醜悪で魔鬼のようだ」。おそらく、『土地』の悪党のうちで一番悪辣で残忍な者は、日本警察の密偵キム・ドウスであるうが、彼もまた太って不細工だけでなく、驚くべきことに、「出っ歯」（！）であった。

ここで、『土地』の語りが善（人）／悪（人）という鮮明かつ仮借ない二分法によって維持されているという冒頭での指摘を思い出してみよう。『土地』の多くの紙面は、悪党どもへの憎悪と呪詛、沸き上がる敵愾心の表現に満ちている。「倭奴」と「親日派」、「民族叛逆者」に対する憎悪と嫌悪は、統制不能な感情過剰の状態となっている。さらに驚くべきなのは、呪詛の感情を秘めたこうした言辞が、作家があれほど嫌悪してやまない日本式グロテスクと瓜二つだということである。例えば、「偉大な英雄」、「人間が到達しうる至高の境地」と表現される抗日闘士キム・ファンが、自分に恋心を抱く女性を振り切つて次のように語る時、その短い表現のうちに入りこんでいるグロテスクな陰惨さは、「日本的なもの」をはるかに凌駕している。

ファンが狂ったように大笑いする。そうして、体を起こしている女にいきなり飛びかかる。ギュッと抱きしめる。女の顔を後ろに反り返らせ、首に顔をうずめるファン……再び低い声で囁

く。

「あの藪睨みと結婚しろ……」

次の瞬間、ファンは女を突き放す。女は倒れこみ、体を横たえらる。

「嫌いなアマがすがりついてくると殺したくなるぜ。倭奴の腹を刺すみたいに、気が狂いそうなほど憎たらしいんだ」（五—二〇五）

欲情を抱いて男に飛びつく女。後ろに反つた女の首。その首に顔をうずめた男。突き倒された女。「殺したくなる」という男の言葉。そこに加えられる「倭奴の腹を刺すみたいに」というセリフ。この短い文章の急迫した連鎖が引き起こすイメージは、「刀とセックス」が結びついた「エロログロ」の快感に他ならない。

一方、チェ・ソヒ家の執事で、抗日運動家たちを背後で支援するチャン・ヨナクは、「従前の抽象的な反日感情」から「真の怒り」とともに「抗日の情熱が噴出する活火山のようになったのを感じる」ようになり、「動物的に日本人を殺せるような気がした」（一六—三四九）。ソヒの息子で優れた天才、日本留学を終えた画家でソウルの中学校教師のファングクは、彼の友達の言によれば「観音菩薩」のような人物であるが、「人間を獣のように屠殺し虐殺するこの時代の悪魔」は「日本だ！」という悟りに達し、「根絶やしにせねば！あの人種こそ根絶やしにせねば！人類が存続するために、必ず、彼らはこの地球上から消えねばならぬ！」と絶叫する（一六—二八六）。新教育を受け、日本に留学した知識人女性たちの対話の中に「噛み殺してやりたい奴ら」「根絶やしにすべきです」（八—一二二）、「悪

の根は切りとらねば」(八―二五〇)といった言辞が当たり前のように使われる。

四、異口同声の人形たち

「悪党ども」へのこうした極端な感情の横溢は、『土地』の叙述の仕方に深刻な混乱と欠陥を招く。ここからは、そのことを検討しよう。先に引用した『土地』における日本(人)論と日本文化論は、それぞれ異なる人物たちによって語られたものである。しかし、前述のように、重要なのは、それらの発言が異なる人物によってなされるにもかかわらずその内容はいつも同じだということである。内容のみならず、使われる語彙、表現の仕方、挙げられる事例が、ほとんど全部同じなのである。この点をはっきりさせるため、次に引用する発言に注目していただきたい。

一言でいって、忍耐と底力のようなものがない人物だ。華麗な門閥でもって軍部を抑える。まあ、日本の奴らは門閥には弱いからな。(二二―三二七)

少佐ぐらいなら若くもなかったはずなのに、幼稚この上ない。日本の奴らの意識水準は、いくら外から何かが入ってきても育つことがないんだ。(二二―三二七)

要するに、日本は礼儀知らずの子鼠なさ。刀を持って出て行ったんなら、敵を斬って勝つなりウチジニするなり、じゃなきゃ謝って和解するなりするもんだろ、なのに刀を振り回して、

こりや大変だ、誰か来て止めてくれる人はいないかってさ。どうしようもない小心者どもさ。(二二―三三七)

「日本に…引用者」もともと何があったというんだ？奪って来て、物乞いしてもらって来て、くっついて来て、日本刀と富士山以外に何かあるか？(二二―三五一)

「日本の奴らは門閥には弱い」「日本の奴らの意識水準は」「育つことがない」、「日本は子鼠」、日本にあるのは「日本刀と富士山」だけといった発言も、これまで見てきた日本(人)論および日本文化論と大して変わらない。しかし留意すべきなのは、この発言が「満洲で日本軍部の恩恵にあずかって暮らす」「右翼の大陸浪人」の村上という人物の口を通じて発せられた、ということである。問題は、日本の軍部に密着している「右翼の大陸浪人」が日本人と日本の軍部をこのような形で非難するという事実の蓋然性の有無ではない。そうしたことは、いくらでもありえる。ただ、この「右翼の大陸浪人」の日本(人)および日本文化を卑下し貶める言辞が、先に取り上げた朝鮮人たちによるそれと一つとして異なるところが無いという点、これが問題なのである。

先の場面は、日中戦争が勃発した一九三七年頃、満洲国の首都新京の日本人社会を描写する中で出てくる部分なのだが、『土地』では珍しく、日本人だけが登場する。ここに登場する日本人たちは、ユ・インシルと恋人の関係にある岡田以外は、『土地』の他の人物や事件とは何ら関係がなく、ただ一回性のエピソードとして登場するにすぎない。ところで、一度だけ現れては消えるこの人物たちの小説内

の役割は何か。二つの章にわたって進められるこの場面で、村上と彼の友人たちは、南京虐殺以降の中国での政治的・軍事的情勢について延々と「専門家的」な時局談を繰り広げる。「日本人の時局観」という題目から明らかなように、作家はここで日本の知識人の口を借りて日本の大陸侵略を槍玉に挙げ、その野蛮さを暴露しなかったのかもしれない。しかし、そのような作家の意図は失敗せざるをえない。すでに見たように、「右翼の大陸浪人」村上は、作家の日本(人)論および日本文化論を繰り返すために登場したにすぎないからである。

要するに、日本(人)と日本文化に対する卑下と嫌悪の情緒が極端になればなるほど、『土地』の人物たちは、身分の貴賤、地位の高低、老若男女、甚だしくは先の引用にも現れているように朝鮮人／日本人を問わず、まったく同じ声を発する人形たち、すなわち極端な感情に満ちた作家の日本(人)論を伝達する一つのメガホン(megaphone)と化す。事情がこうである以上、『土地』において日本(人)への憎悪と嫌悪を露にする登場人物の独白や想念が、いつの間にか作家もしくは話者の露骨な語りに変わったり、人物間の対話が作家の言葉としばしば混ざったりすることは、少しも不思議ではない。「あらゆる気ちがい沙汰をやり尽くした日本の行動」(二二―三二五)、「心臓に鉄板を敷きつめた日本政府」(二二―三二六)といった表現は、人物間の対話ではなく、語り手の中立的な語りの中でいきなり出てくることによって小説の文体と語調(tone)に大きな混乱を招くのだが、このような例は無数にある。この時の作家は、人物と事件を配置し律する隠れた手ではなく、小説の舞台上に直接飛びこんできて語る理解不能な存在となる。それだけでない。

「読者は記憶するであろう」とか、「ああ、まったく、忘れていたが、誰々はかくかくしかじかになった」とかいう具合に、いわゆる全知的視点の語り手が小説の舞台に素顔を突然現わすともんでもない文体の混乱は、この小説ではよく起こる。

また一方、「悪党」に対する沸き上がる敵愾心を表現するたびにまるで無声映画の弁士のように舞台の前に飛び出してきて長い演説を並べ立てるこの「啓蒙的」作家の存在は、この小説で「親日派」に劣らず非難対象になっているのが「啓蒙主義者」たちだということ进行起すなら、深刻な矛盾だと言わざるをえない。作家の言によれば、「高官大爵たち、地主たち、親日派、彼らの子孫たちが東京留学に旅立ち」「日本の稚拙な文化に染まってきてこの山河にふりまく時」、「朝鮮の民」は「暮らしの抛り所を奪われて流浪の民となつて」さまよっていた。日本留学生をはじめとする新式の知識人たちは、「数千年の経験を蓄積した我が歴史を、数千年の風土に合うように選りに選って打ち立てた我が文化を否定し侮り蔑み、我が大地で千年を生きた巨木を打ち倒し、西欧の種一つもらつてきて」植えた。その知識の正体は、「自分のものを壊し、痕跡を消し去ろうとするもの、いわゆる改造論であり啓蒙主義」なのだが、それは「民族叛逆者」「裏切り者」のものである。「東京留学生とキリスト教と日本の啓蒙主義の三拍子」(二四―六四)に対する作家のこのような反感と嫌悪は、日本(人)に対する憎悪に負けず劣らず頻出する(啓蒙主義を代表する李光洙と崔南善への人身攻撃的な罵倒も簡単に見つかるのだが、それに関する議論は本稿では省略する)。

あの啓蒙主義の仮面をかぶつた親日分子たちが民族を改造する

んだと言つて、われわれのものを一つ残らず捨て去り、われわれのものを一つ残らずぶち壊し、われわれのすべてを否定し、愛国、憂国の志士として世間にその顔を見せると、人々は彼を先覚者と仰いだのだ。(二二—二七)

いずれにしろ、彼ら「東京留学生…引用者」が民族を裏切り、我が民に背を向けてきたことをなかつたことにはできないだろう。彼らのほとんどが出世志向だったのだから。…彼らが染まってくる日本の価値観が、歴史を切り刻み、民族の精神を破壊する危険の負担は深刻だ。(二二—五七)

今日この地で、中間層をはじめとして下部層にまで浸透してきているのは、倭奴の植民政策がもたらした啓蒙主義、つまり朝鮮を抹殺しようとする単なる口実であり、見た目はいい名分のように唱えてはいるが。そういう事情とは違ふとしても、キリスト教がもたらした啓蒙の様相、すなわちよその文化をこの地に植えている現況を鑑みるに…(二二—四一)

同じ内容が異なる人物によつて話されるといふ現象はここでも相変わらずだが、「啓蒙主義」と「日本留学生」を「親日分子」「民族叛逆者」「裏切り者」などと非難するこの語法においていっそう問題なのは、作家がこうした語法のうちにある自分の矛盾をまったく認識していないという事実である。啓蒙主義や啓蒙文学に対する神経質な拒否感と鋭い非難にもかかわらず、作家は『土地』全体が他でもない啓蒙主義文学の語りの文法——たとえば、封建社会から近代

への移行過程についての社会歴史的探求、近代的変化に直面した個別の人間たちの具体的な生活相、近代国家形成のための民族的同質性の鼓舞、そしてそれらすべてに関する啓蒙的形象化——をそのまま踏襲しているということには完全に無頓着なのである。

作家意識の矛盾は、「日本留学生」においていっそう深まる。作家の言によれば、東京留学生たちは、「高官大爵、地主、親日派」の子孫であり、「他の民が日本の暴政の下で呻吟している時に」彼らを「裏切り」、「出世のために」日本に留学した。彼らがしたことは「数千年間研磨してきた我が文化を否定し、日本の価値観に染まってくる」ことであつた。ところが驚くことに、作家は、『土地』の主要人物の多くが東京留学生だつたということについては、何の説明もしない。のみならず、東京の一流大学に通うことがその人物がどれほど優秀な頭脳を持つのかを立証する例としてよく挙げられる。いくつかの例を見てみよう。

『土地』の主人公チエ・ソヒの息子ファングクとユングクは、「大地主の息子」で、いずれも日本留学生である。晋州からだ一人ソウル(四)の「K中学校」に進学したファングクは、「東大ではなかつたものの、母の願ひ通り法学部を志望し、早稲田の予科に入学」する(九—二八五)。早稲田を退学して「東京美術学校」に転学した彼が、東京の高級住宅街の広く静かな下宿で、女中が運んでくる食事をとつて過ごす姿は(二二—六二)、大地主の息子であるファングクの背景を考えれば不思議なことではない。だが、この場面の描写の直前に、作家が東京留学生を「裏切り者」と非難する長々しい演説文を並べていることは、どう説明すればいいだろうか。作家の言によれば、「募集で連れて来られた朝鮮の数多くの民が、恐ろしい

鞭の下でこの世とあの世をさまよっていた時」、「体力であれ頭脳であれ門閥であれ、選ばれてここに来た」留学生たちは、「我が民に背を向けてやって来た」「裏切り者」である。東京留学生たちが「染まってくる日本の価値観が歴史を切り刻み、民族の精神を破壊する危険の負担は深刻」だが、留学生の中でも「食べるに困らない階層は、たやすくダンディズムの無風地帯に逃亡」するのである（一二―五七）。

このような語りのすぐ後に、作家は東京の下宿にいるファングクを描写する。朝起きた彼がまずするのは、「カンディンスキーの初期の絵」を見ることである。続いて日本人女中のオハツに食事の注文を聞かれ、廊下に出て庭の小さな池を眺めながら考えに耽る。故郷の父親の心配などで憂鬱な彼の内面が描かれはするものの、東京留学生を「裏切り者」と叱咤したすぐ前の作家の声は、ここではまったく聞こえない。「食べるに困らない階層は、たやすくダンディズムの無風地帯に逃亡してしまった」という作家の声も、ダンディズムと深く関わるカンディンスキーの絵に心酔するファングクに対しては沈黙を守る。

一方、社会主義の秘密組織に関与しているファングクの弟ユングクは、日本で「一流の農科大学」を終え、さらに「Y大学」で経済学を専攻するのだが、日本の一流大学に二回も通った彼の経歴は、あらゆる人の賛嘆と羨みの的となる。そのユングクを「男の中の男、かっこいい奴」（二四―三九七）と賞賛するイ・シウは、満洲の荒野でその生を閉じた独立志士イ・トンジンの孫であり、チェ参判家と縁の深いイ府使家の当主なのだが、京城医学専門学校を卒業した医師である。彼は弟のイ・ミヌが日本で「つまらない私立」に通って

いるためにプライドが傷ついていたが、それは当事者のミヌも同じだった。ミヌは、「親日をして利権のおこぼれにあずかる売国奴」たちに怒りを感じる若者で、「京城帝大の試験に落ちて、翌年京城医学専門学校の試験にも落ち」てしまったのだが（一三一―一八一）、そのたびに兄のイ・シウは「先に寝こんでしまふ」。そうこうしていたミヌが再度試験を受けてついに早稲田大学に合格するや、イ・シウはたいそう満足する（一四―三九五）。他方、晋州の財産家の名士であるファングクの友人イ・スン Chol は、「度量が大きく」「頭の切れる」、柔道で鍛えた体を持つボス気質の男である。晋州の親日派キム・ドウマンの息子キム・キソンを、「名ばかりの大学でどこにあるのかもわからないような学校に留学していることを反吐が出るほど威張り散らしている野郎」（二二―三二六）だと軽蔑する彼は、「日本の一流大学の法学部」を卒業するも、「高等文官試験」に三年続けて落ち、今は晋州で指折りの企業家として鳴らしている。

このように、東京留学生に対する作家の激烈な反感と非難は、『土地』において東京留学の経験を持つ多くの肯定的な人物たちには当てはまらない。また、これら肯定的な人物たちの間に満ちている「学閥主義」に対しても、作家は何の批判の視線も向けない。だとすれば、東京留学生と「彼らが染まってくる啓蒙主義」に対する作家のあの仮借なき非難の言辞は、一体どこに向けられたものなのだろうか。そして、このような矛盾はどこから生じたものなのだろうか。日本（人）と親日派、つまり「悪党ども」への極度の憎悪と感情過剰が、作家をして冷静な語り手の位置を見失わせたのだろうか。

五、「朝鮮のジャンヌ・ダルク」

『土地』において極度の憎悪の対象となる日本人や親日派であるが、日本人の中で唯一の例外になっているのは、ユ・インシルと恋愛関係にある岡田ジロウである。小説の舞台に挿話的にちよつと現れては消える他の日本人たちとは違い、岡田は『土地』の語りによって深く介入している主要人物である。同時に彼は、日本の帝国主義的侵略に強く憤る良心的日本人であり、朝鮮人の愛国志士たちの同志でもある。この「滅多にいない日本人」と東京留学経験のある女性知識人ユ・インシルとの叶わぬ悲恋は、いろいろな意味で興味深い素材である。

注目すべきは、この悲恋の物語が、ある若い男女の私的な恋物語ではなく、「民族」と「血」の隠喩である一つの語りの装置、さらには、その絶対性を確認する事件としての機能——そしてそれこそが作家の意図だったのだろうか——を果たすということである。ユ・インシルと岡田の出会いには、当事者たちにとつても周囲の人物たちにとつてもそうだったように、個人対個人ではない「朝鮮民族」と「日本民族（もしくは人種）」の出会いと理解され、またそのように描かれる。例えば、ユ・インシルと岡田の出会いの場面で、読者は、若い恋人の間でよくある愛情に満ちた対話や行動などを見ることができない。その代わりに、日本の朝鮮侵略に対するユ・インシルの悲憤に満ちた攻撃、朝鮮民族と民族文化の優秀さの主張およびそれに対比される日本文化の低俗さへの熱を帯びた難詰、そして彼女に同調し説得される岡田の姿などが、この恋人たちの出会いの場面を支配する。

事情がこうなのだから、この恋が当事者たちにも周りの人々にも「民族」や「血」に対する「裏切り」と受け取られるのは当然のこ

とである。岡田ジロウの子を産んだユ・インシルは、「私の行動が石で打ち殺されるべき裏切りであることを私自身が認めます」（一二—四二）と泣き叫び、その子を預かって育てるチョ・チャナは「インシルにとつて命より大きいのは、祖国と同胞を裏切ったということ」（二二—四四五）だと悟る。一方、ユ・インシルの兄ユ・インソンがインシルと岡田の関係を知って受けた衝撃を描写する次の場面は、この恋愛事件を取り上げる作家の意識の問題性を一目瞭然にする。

「あいつは誰だ！オカダってのはどういう奴なんだ！」

民族意識なく、ほとんど同族のように親しくしてきた岡田ジロウ、その欠点さえも人間的な魅力だと思ってきた。もつと正直に言うなら、弟のように思つてもいた。その岡田が、突然凶々しいもののように押し迫ってくる。害虫のようにぞつとする存在として意識を占領してくる。異民族、征服者、巨大な足の裏で山河を隅々まで踏みつぶす怪物。……男たちは、時には日本の女と関係を持ったし、インソンもそういう男たちを何人も見てきた。もちろん望ましいこととは思わなかったが、ここまで激しい恥辱と嫌悪感を持たされはしなかった。あの北満州の地で独立軍を討伐する日本兵に陵辱された朝鮮の女たちが自決でもつて生を決算した事件は、胸にわだかまっているのに。（九—四四三）

フランツ・ファノンには、植民地宗主国フランスに留学した植民地アルジェリア出身の黒人男性エリートたちが、フランス本土に足を

踏み入れて最初にするのが白人娼婦の「征服」だったということを取り上げ、被植民者の内面化した植民地主義的意識とその分裂を分析したのだが、妹が「支配民族」と恋愛しているという事に衝撃を受ける「兄」の内面こそ、実に問題である。広く知られている通り、帝国主義者にとって植民地はしばしば「女性」として表象される。つまり、植民地の獲得は、強い男性による女性の征服として隠喩される。同時に、植民地の男性にとってそれは、自分の女、すなわち妻や娘、妹などの強奪として表象される。彼はもはや「男性」でありえず、「父」でありえず、「兄」でありえない。植民地の男性にもたらされるこの「去勢」の感覚こそが、植民地主義の模倣の結果であり、また彼を植民地主義の模倣者にし続ける心理的動力である。こうして、「征服者の女」を「征服」することによって去勢された自らの男性性を取り戻そうとする植民地の男性は、植民地主義を忠実に学習した永遠の奴隷でしかありえないのである。

妹が日本人と恋愛していることに恥辱を覚える「兄」ユ・インソンは、なぜ朝鮮の男が日本の女と関係を持つことについては大した恥辱を感じないのだろうか。「征服者の女」を「征服」した「被征服者の男」の快感が、この男性たちを支配しているからである。当然、自分の女が征服者の男と関係を持つことに対して、この男性たちは深い無力感と憤りを感じる。この無力感と憤りを彼らはどうやって解決するのか。ユ・インソンは、妹の恋愛事件への怒りと恥辱の感情を、「日本兵に陵辱された朝鮮の女性たちが自決をもって生を決定した事件」と結びつける。外部からの侵略を女性の身体の毀損として表象し、そうやって毀損された女性の身体を抹消することによって（「自決」）傷の回復を企てる乱暴な家父長主義^{〔五〕}は、常に帝

国主義の植民地征服と対を成すものであった。ユ・インソンは、そのような植民地男性の心理を典型的に表わしている。「誰が何と言ってもインシルは朝鮮の娘であり、朝鮮のジャンヌ・ダルクなのだ」と言う時、彼は耐えがたい恥辱を妹の火刑（ジャンヌ・ダルク）によって解決するのである。要するに、「毀損された妹」は「朝鮮の娘」として呼び出され、聖なる死に進むことによってすべての穢れを洗い流すのである。この慰めの後になってようやくユ・インソンは、どこかに永遠に消え去る決心をしたインシルに五百圓の金を渡すのである。

このように、ユ・インシルと岡田の関係は、私的・個人的関係ではなく、「民族」と「血」の換喩物、植民地男性の怒りと恥辱を代弁する象徴物として理解される。「民族」と「血」が絶対的なものであるかぎり、この関係のハッピーエンドは期待すべくもない。なるほど、悲恋の二人の主人公は、自らの種族から追放され、異国をさまよう身の上となる。ユ・インシルは満洲で中国人に扮して生き、岡田は満洲一帯を寄る辺なく徘徊する存在になるのだが、この結末は、自らの種族を「裏切った」結果としての「追放」(expulsion)や「破門」(excommunication)という表現を強く帯びる。「民族の尊厳は変わることはない普遍的倫理」(二三―四五七)という定言的命令がある限り、民族を越えた個人の愛が叶うことはない。岡田ジロウという例外的な日本人の存在は、そのことを伝えるためのものなのかもしれない。だとすれば、この例外的人物は、例外というより、むしろ『土地』の他のあらゆる人物たちと同じく、作家の「民族至上論」を説くためのもう一つのメガホンにすぎない、と見るべきであろう。

六、ワンダーウーマン (Wonder Woman) と「田園日記」

闇が濃ければ光も強い。この言葉は、『土地』における善(人)と悪(人)の形象化の方法を指すの一番ふさわしい。通俗メロドラマの紋切り型の描写法、すなわち凶悪で横暴な「悪党」と至高至純の「善人」という極端な対比は、『土地』の語りを導く基本動力である。醜悪で堕落した「悪党ども」(「倭奴」「親日派」「民族叛逆者」)の反対側に、善良で道徳的で人間的美德と超人的勇氣に満ちた「善人たち」(抗日独立闘士、民族主義的知識人、農民をはじめとする「民草」)が存在する。

チェ参判家の下男からチェ・ソヒの夫となる、独立闘士であり天才的な画家のキル・サン、巫堂の娘月仙との生涯にわたる胸焦がれる愛によって読者の心の琴線に触れる平沙里の農民ヨンイ、キル・サンとチェ・ソヒの息子ユングクとファングクなどは、みな人間的な品位と威厳に溢れる人物である。どんな苦難にも屈しない超人的な勇氣と忍耐、卓越した能力、高潔な品性は、彼ら全員に共通する資質である。中でも、「善(人)」を代表する男性人物は、おそらくキム・ファンであろう。悲劇的運命の主人公で地下運動家としてのキム・ファンは、限らない神秘に包まれた人物であり、あらゆる人々を虜にするとてもないカリスマの持ち主である。地下運動家たちの集まりで、彼はいつも「岩のような沈黙」、「突き刺すような眼光」で、その場の人々を圧倒する。一度見れば骨抜きにされる男性的魅力(一夜の情事を切望した婦人が彼の冷淡な拒絶に遭って首吊り自殺するほどの)も、この人物の形象において欠かせない資質である。彼は「一人の人間が到達しうる至高の境地」(八―四八)、「英雄の息

子」(六―一四三)、「キム將軍」(八―三四九)と賞賛されるのだが、程度の差はあれ、他のあらゆる肯定的男性人物たちも、いつも似たようなやり方で賞賛と敬慕の対象となる。その上、善(人)に属する人物たちは、皆「美形」である。「悪党ども」が醜悪で見苦しい容貌と描写されるのに比して、善人たちの俊秀で凛々しい容貌は頻繁に強調される。

男性人物たちと同じく、肯定的女性人物たちもまた並外れた美貌と品位を備えており、人間的美德に満ちている。ソヒの小間使いから妓生になったボンスン(キファ)、親日貴族チョ・ヨンハの妻イム・ミョンヒ、岡田ジロウと恋愛関係にあるユ・インシル、キファの娘で女医のヤンヒョンは、みな「美人」で、特別な才能や能力の持ち主であり、いつも彼女たちを敬慕する男たちに囲まれている。

だが、男女をひつくるめた『土地』の登場人物全員の上にそびえ立つ至高至純の存在は、言うまでもなく女性主人公のチェ・ソヒである。人々に息を吞ませる彼女の跳びぬけた美貌の強調は、彼女が登場する場面で漏れなくなされる。例えば、義兵討伐に乗り出した日本軍がチェ・ソヒの家を搜索する次の場面を見てみよう。

「私がこの家の主人ですが、何のご用でしょうか」

流暢な日本語、厳肅な眼差しにベッピンと言おうとした声をゴクリと吞みこんだ倭兵が、多少丁寧に質問する。

「あなたが主人ですか？」

「そうです」

(中略)

倭兵は完全に心折られる。

「……奥さん、申し訳ありませんが、家宅捜査はしなければなりません」

丁重に出てきたが、家宅捜査を放棄しようとはしない。ソヒはニコリ笑う。

(中略)

かなり和らぎ、言葉遣いは親切でさえあった。彼は捜査を開始するかにように銃を手にとったまま、ソヒの美貌に魂を抜かれて腑抜けになっている三人に合図をする。

「礼儀を守ってください。家の中に入るなら靴を脱いでください。わかりましたか？」

「わ、わかりました」

侵入し難い威厳に気圧されたように、倭兵たちは散り散りになって捜査を始める。(八一―五一)

横暴な「倭兵」たちがソヒの「美貌に魂を抜かれて」「腑抜け」になり、「侵入し難い威厳」に押されて「気が縮み」どもるこのような場面は、ソヒが登場するすべての場面でほとんど間違いなく再演される。龍井の日本領事館に集まった日本人官吏の夫人たちもまた、ソヒの美貌と威厳に圧倒されて魂を抜かれ、情報を探りに来た朝鮮人刑事もソヒに会って脂汗をかき、背を向けながら「何かにとっつかれたみたいだ」という感じに捕われ、ソヒが乗った渡し舟を漕ぐ船頭は「ソヒのほうを盗み見ることさえできない」。チョ・ジュングの息子のせむしのビヨンスにとって「ソヒは光であり、宇宙の神秘だった。観音像であり、崇拜の対象であり、人間ではなく天上のもの」であった(一一三―二〇七)。「玉を削って作ったように端麗で美しい

体」(一一三―一八七)を持つ彼女は、甚だしくは「老いもしない」(一一三―三三四)。読者が忘れるかもしれないでも思ったのか、作家は「彼女は美しかった」、「本当に美しかった」という感嘆の言葉を休みなく浴びせる。

四八歳のチェ・ソヒは今も美しかった。西の山に日が落ちる、その夕焼けのように美しかった。波をかき分けていく船、船首に立っている女性、白い熟素甲沙の二重のチマチョゴリを着ており、結び紐とチマの裾が強風にはためく。彼女はまことに美しかった。高貴で威厳に満ちていた。(一一三―二六〇)

もちろん、ソヒは容貌だけが抜き出ているのではない。あらゆる男たちを凌駕する事業家としての手腕と度胸、どんな危険と苦難にも屈しない知略と胆力、配下の者たちの面倒を最後まで見る人間味は、彼女が登場する場面ではぼくかさず繰り返して描写される。「鶴のごとく高貴で事物に精通しておられ、雌虎のごとく恐ろしくあられた」(一一五―三三〇)外祖母「ユン氏夫人」の継承者である彼女は、すべての人たちの困難と苦痛を解決する救世主である。「親日派」と非難されながらも彼女は黙々と独立運動を背後から支援し、自分と関係のあるたくさんの人々の生活に気を配る。チェ・ソヒ家の執事チャン・ヨナクの言葉によれば、「いつも絹の服を着て夜道に行く、人知れずなことをどこの誰が知ろう。あの方は泰山のように風を塞いでくださったが、物心両面でそうならなかったら、皆散り散りばらばらになっていただろう。男に生まれなかったことが残念だ」(一一五―三六一)。要するに、彼女は典型的なシリアルク

イン・メロドラマ (Serial-Queen melodrama) の主人公、つまりワンダーウーマン (Wonder Woman) なのである。

苦しむ善(人)が本来の位置を回復し悪(人)が膺懲されるのは、あらゆるメロドラマの必然的な帰結である。『土地』も例外ではない。悪党の謀略によって故郷を追われて異域をさまよっていた君主が、忠義な家臣たちの助けを受け、臥薪嘗胆の末ついに復讐を果たし、権力の座に復帰する——『土地』は、現代の読者にとってとてもなじみ深いこのようなプロットに依存することによって、読者の共感を求める。この苦しみと膺懲の過程がスペクタクルであればあるほど、読者の熱中は倍加し、メロドラマの効果は極大化するだろう。

しかし残念ながら、『土地』には、読者を熱中させるほどのスペクタクルはとも見当たらない。『土地』の語り非常に特徴的なのは、事件の進行が人物間の対話や独白によって処理されることがかなり多いという点であり、それは事件を推測し雰囲気をつかむには効果的かもしれないが、劇的な事件の現場に読者を案内することはできない。頻繁に登場する秘密の地下組織の活動家たちが実際に何をしているのかはまったく描写されない。死線に立つ彼らの活動は、いつも酒の席での時局談や論争だけで描かれる。結局読者が見聞きするのは、いつも酒を飲みながら情勢を予見し論争を繰り広げる抗日闘士たちのとりとめがなく退屈な時局談だけである。挙句の果てに、太平洋戦争の勃発前にあらかじめ「米国の参戦」を予見したり(一三—三一八)、徴用や学徒兵召集を避けて智異山に逃れた人物たちが日本の「降伏」を云々し、「解放」以降の「社会主義政権の樹立」について論争する(一六一—四一二)^(六)といった驚くべき予言も、この時局談に含まれる。

だが、スペクタクルがないからといって、この小説のメロドラマとしての性格が弱まることはもちろんない。『土地』の本領は、やはり「農村家庭劇」(Home Drama)にあると言える。『土地』において最も輝く部分は、農村、特に小説の舞台となる平沙里の農民たちの日常生活の描写であろう。結婚と出産、誕生と死といった人間の生の運行の中に繊細に織りこまれた農民の日常のこまごました項目を描く時、作家の筆は冴える。「悪党ども」に呪詛を浴びせかける際に作家のメガホンになってしまふ人物たちとは違って、この時の農民たちは各々生きて呼吸する活き活きした性格になる。

政治的、歴史的環境とは無関係に、変わることもなく続く家庭の出来事、たとえば親子の不和、夫婦の不和、嫁と姑の葛藤、本妻と妾との葛藤などは、この農村家庭劇の主要な素材である。作家が幾度となく強調する日帝の「収奪政策」にもかかわらず、『土地』の舞台上の平沙里の農民たちは、時が経てば経つほどだんだん余裕ある暮らしができるようになるということは、この小説の本領が、農村家庭劇、いわば「田園日記」^(三)の世界だということを勘案するなら、少しも驚くべきことではない。権力の座に帰還した「君主」あるいは「封建領主」の慈悲深い思いやりのもとで、平沙里の農村の日常は、世の中の変化、年月の流れと関わりなく、いつも同じように進むのである。

農村共同体の変わらない日常とともに繰り返されるのは、才子佳人の叶うことのない愛の物語である。『土地』の多くの人物を苦しめる最も大きな問題は、男女間の愛情問題である。様々な種類の愛情談、三角関係、不倫、邪恋、悲恋、哀恋といったストーリーが、親世代から子世代、孫世代へと続く。スペクタクルの不在に代わるこ

の絶え間ない「婚事障害譚」こそ、『土地』のあらゆる人物、あらゆる空間を導く基本的な語りである。だが多くの場合それは、植民地社会のとてつもない速度、特に都市の変化に追いつくことができずに同一の物語の構造や心理描写を繰り返すので、手に汗握るメロドラマとしての効果を得ることができない。すべての個人の物語が「民族」という主人公の物語に収斂するこのメロドラマの構造上、それは避けられない結果なのかもしれない。

長篇大河小説『土地』は、次のようにして終わる。

「何と言ったの」

「日本が、日本なんです、降伏を、天皇が放送したそうです」

ソヒは海棠の枝をつかんだ。そして地面に座りこんだ。

「本当なの……」

囁くように尋ねた。その瞬間、ソヒは自分を縛っていた鎖が騒がしい音を立てて地に落ちるのを感じた。次の瞬間、母と娘は強く抱き合った。その時渡し場では、町から帰ってきて渡り舟を降りたチャン・ヨナクが、畦道で万歳を叫び踊りながら歩いていた。帽子と周衣はどこかに脱ぎ捨てたのか、チョゴリ姿で「万歳！ わが祖国万歳！ ああ、独立万歳！ みんな！ 万歳だ！」叫び、また叫び、踊り、両手をひよいひよい挙げ、涙を流しては声を上げて笑う。青空にはちぎれ雲が流れていた。

「解放」の知らせとともに、「ソヒは自分を縛っていた鎖が騒がしい音を立てて地に落ちるのを感じた」。「抗日意識の噴出」とともに「動物的に日本人を殺せるような気が」していたチャン・ヨナクは、

踊りながら「解放」の知らせを喜ぶ。長大な大河小説の大尾を飾るこの場面に對して、私たちは最後に問わなければならない。ソヒを縛っていた鎖とは何だったのか。彼女は、何から「解放」されたのか。チャン・ヨナクは、「動物的に日本人を殺せるような」憎悪と怒りをそのままにして、何からの「解放」を喜んだのか。「仇敵」への憎悪と怒りを秘めたまま、彼は、そして私たちは、「解放」されうるのだろうか。それはありえないということ、そしてそれがありえない限り、このような民族・メロドラマはまた絶えることなく書かれるということ、いわゆる「解放」以降の歴史は、そのことを立証している。

〈注〉

(一) Ben Singer 『メロドラマ와 모더니티』이위정訳、文学동네、二〇〇九年、二〇二頁。

(二) 同右、一九頁。

(三) 『土地』のテキストは、一九九四年にソル出版社が刊行した『土地』(一〜一六卷)を用いる。同小説の引用は、巻数と頁数のみを表記する(一一五七、四一一九など)。

(四) 作家は『土地』の登場人物たちが一九二〇年代に通った中等学校をすべて「中学校」と呼んでいるが、これは事実と異なる。一九三八年の第三次教育令の改訂によって内鮮共学が実施されて朝鮮の「高等普通学校(高普)」が「中学校」と改称されるまでは、朝鮮において「中学校」は日本人子女が通う少数のもの他には存在しなかった。小説内の情況から、一九二三年にファングクが進学した「K中学校」は「京

城第一高普」だと思われる。それ以外にも作家は晋州や釜山にある「高普」をすべて「中学校」と呼んでいる。他方、一九四〇年代晋州の「E S 高女」と表記された学校も、実際には「E S 高等女学校」、すなわち「E S 高女」と表記されるべきである。

(五) 『土地』全体が頑迷な男性主義、封建的家父長主義に立脚しているということは、また別の分析を要する主題だが、本稿では紙面の都合上次の機会を期するしかない。

(六) 「米国の参戦」を期待しつつ「日本の敗北」を予想するのは晋州の事業家イ・スン Chol なのだが、太平洋戦争が始まってもない時点で、植民地地方都市の平凡な朝鮮人がこのような予言をする可能性は絶対がない。また、学徒兵召集を避けて智異山に身を隠した朝鮮人青年たちが「日本の降伏が間近に迫っている」と言って「解放」の日を準備するという点でも、その時点では想像しえないことである。その他にも、『土地』の人物たちは、「親日派」を除いては、皆「日本の敗北」を予見しており、「解放」の日が来るまで辛抱して待とうという姿勢を示す。それほど多くの人々がそこまではっきりと日帝の敗北を知っていたならば、「植民地」も「親日派」もなかったはずである。

(韓国・延世大学国文学科教授)

(韓国・延世大学国文学研究専門研究員)

【解説者注】

【一】『土地』は韓国を代表する女性作家、朴景利が一九六九年から一九九五年まで執筆した長編大河小説である。地主であるチェ氏一家の興亡と周辺人物たちの受難の生を韓国近代史にもとづいて描いた作品

として、韓国文学を代表する小説である。さらに詳しい説明については「解説」を参照して頂きたい。

【二】「日本はない」という言葉は、一九九三年に韓国で刊行された本のタイトルとして当時社会的な流行語になった。今は政治活動をしている田麗玉が、韓国の放送局 KBS の東京特派員として日本に二年半の間滞在した経験を基に書いた日本文化論である。とくに日本の女性に対する偏見と先入観が本全体に流れているものの、未だ民間における本格的な日本との接触が少なかった時代において、日本に対する一種のルサンチマンの感情とも相俟って一躍ベストセラーとなり、一九九四年には日本語版も出版された『悲しい日本人』(金学文訳、たま出版)。

二〇〇〇年代に入ってから多くの内容が剽窃であったことが判明した。

【三】「田園日記」とは、一九八〇年から二〇〇二年まで韓国の放送局 MBC で放送されたドラマである。産業化とともに都市労働者が増えていくなか、農村における大家族の物語をノスタルジックに描くことで、長い間大きな人気を博した。韓国における「農村家庭劇」の代表格である。

解説

ナシヨナリズムは非常に不思議なものである。ベネディクト・アンドーソンがすでに指摘したように、ナシヨナリズムは他のイズム(たとえば、マルクス主義・ポスト構造主義・フェミニズム等々)とは違って、代表的な理論家や整理された体系的な思想の構造をもっていない(二)。にもかかわらず、それは他のいかなるイズムよりも現実において大きな力を発揮している。のみならず、ナシヨナリ

ズムは時代の変化とともに自己の外延や内的な形式を随時変える。とりわけ、日韓において九〇年代に絶頂に至ったいくつかのナショナリズム論は、今日におけるナショナリズムの新たな変化の前では、もはや分析枠としての機能を喪失しているかのようにもみえる。

一方では、民族的・人種的な差異による紛争が世界で絶えず起りつつも、同時にその裏側にあるグローバル資本主義や多文化主義の存在が指摘される。大澤真幸が述べるように、ナショナリズムは普遍性と特殊性の両方に作用するものであり、今日ではその交錯の度合いがさらに増している⁽¹⁰⁾。出版資本主義（アンダーソン）、産業化（アーネスト・ゲルナー）、原初的なエスニー（アンソニー・スミス）などをもつて今日のナショナリズムの特性を説明することは、もはや不可能に近いといわざるをえない。磯前順一が批判することく、ナショナリズムは、単なる「想像」／「創造」の過程や国民国家の一方的な暴力の問題に回収されるものではなく、そこには未だ完全に解明できていない感情や内面の問題が宿っているのである⁽¹¹⁾。しかもわれわれは、そこに帝国主義や植民地主義の諸問題をも加えなければならない。

日韓のナショナリズムの問題に照準を合わせる場合、事態は一層複雑になる。日本と朝鮮はもつとも近い距離で互いを映し出す鏡であり、いわば敵対的共犯関係をなしているからである。こうした状況のなか、金哲の論文を日本に紹介することは大きな意味をもつと思われる。この論文には、普遍性と特殊性に対するナショナリズムの屈折した欲望、感情と内面の問題、植民地支配とそこからの解放などが語られているのであり、それらはいずれも今日のナショナリズムを考えるさいに重要な主題になるからである。

まずは、主な分析対象である朴景利の長編大河小説『土地』について簡単に説明したい。『土地』は、韓国文学の最高峰とまでいわれる作品であり、韓国では全国的な人気を誇っている。悔恨に満ちた韓国の近現代史を躍動感ある人物描写や筆致で描き切った『土地』は、解説者も大変感動的に読んだ覚えがある。韓国には朴景利や『土地』に関する文学館が全国に三カ所もあり、最近は「土地学会」も創立された（その創立記念学術大会は金哲が所属する延世大学で行われた）。『土地』は、映画やドラマ、ミュージカルとしても制作された、いわば韓国文学のカノンである。

韓国文学を代表する小説に、これほど暴力的な他者認識と自民族中心主義が散見されることも非常に驚くべきことであるが、韓国の国文学者たちがこの点について今まで沈黙してきたこと——あるいはみてみないふりをしたのか——は、解説者には到底理解できない点である。この論文は、韓国の民族主義および国文学の閉鎖的な性格と長い間格闘してきた金哲だからこそ書き切ることができたものであり、その重要性はいくら強調しても強調し足りない。そのなかでもとりわけ特記すべきであると解説者が考えている点をいくつか述べておきたい。

まずは、この小説が「善」と「悪」の二分法にもとづいていながらも、金哲がくり返し指摘するように、近代性——啓蒙主義、留学生、知識人の形象など——については分裂症的な認識をみせている点である。また、この分裂症は、『土地』の基本的な構想が地主と農民たちの封建的な平和の世界——停止した時間のなかで一所懸命働く農民と、かれらを慈愛で援護する君主——を前提としていることを考えれば、その深刻さがもっと明らかになる。近代性に対する歪

んだ欲望と前近代に対するノスタルジアの感情、この二極化は、特殊性の強調を通じて普遍性を獲得しようとするナシヨナリズムの構造を克明に物語っているといえよう。

つぎは、日本（人）と親日派を「悪」に、朝鮮（人）を「善」に位置づける単純な認識が、人種差別主義的な言表として現れる点である。これに、在特会の問題など、最近日本の人権概念に大きな危機が迫っていることを考え合わせるなら、本論文を単に韓国ナシヨナリズム批判ではなく、われわれの共通の問題として読みこむべきだという点に気がつく。

ここで注意したいのは、アルベール・メンミが述べるように、人種差別主義が「私は人種差別主義者ではないが、しかし……」（四）といった認識構造をもっている点である。つまり、人種差別主義とは、極端的な思考法ではあるものの、同時に平凡な日常の感覚に根ざしているのである。『土地』における人種差別主義的な発話が批判されてこなかったことは、ナシヨナリズムの凡庸さに染まっている現代韓国の恐ろしい姿を垣間見させる。在特会の会員のほとんどが——靖国神社付近をうろろするウルトラ・ナシヨナリストではなく——普通の一般市民であることを想起して頂きたい（五）。

なお、もう一つ解説者が改めて本論文から感じたことを述べておくと、帝国主義や植民地主義の暴力が真っ先に向かうところには、つねに女性がいるという点である。本論文で述べられている日本人男性の子供を懐妊した女性の悲劇的な生と朝鮮人男性たちの暴力的で矛盾した態度は、九〇年代以後、日韓の間で大きな争点となっている慰安婦問題を含めて、植民地とジェンダーという視点の重要性を再び想起させてくれる。

最後に、金哲のナシヨナリズム批判の中心的な主張だと思われる点を述べ、解説を終えたい。それは本論文の結論部に出されている問いでもあるが、すなわち前述のような状況において、旧植民地側は真の「解放」を手に入れることが可能だろうか、ということである。ルサンチマンと自民族への自画自賛のくり返し「解放」と等値されるところに真の「解放」がありえないことは、今さらいう必要もなからう。金哲は魯迅の言葉を引いて奴隷の解放について論じたことがあるが、それは「解放」への幻想を拒否し、道なき道を歩かねばならない「絶望」に耐えることだという。

かかる意味で、『土地』の主人公たちは真の「解放」を迎えたとはいいがたく、今日のわれわれも、かれらとさほど変わらない状況にあることを自覚する必要がある。さらに現在の日本もまた、そうした「絶望」と向きあおうとする決意をもたないかぎり、帝国主義的侵略の過去や、再び力を伸ばしているナシヨナリズムの呪縛から真の「解放」を経験することはないだろう。金哲のこの論文はわれわれにこうした思考を促している。

※本論文は、韓国の『日本批評』三号（ソウル大学日本研究所、二〇一〇年）に載せられた金哲の同名のハングル論文を訳したものである。翻訳は田島哲夫の一次翻訳文にもとづいて沈熙燦・原佑介（日本学術振興会特別研究員）が若干の修正を加えた。ここで掲載を受諾してくれた著者と訳者の二人に心から感謝の意を表したい。

へ注

- (一) ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』N T T出版、一九九七年。
- (二) 大澤真幸『近代日本のナショナリズム』講談社、二〇一一年。
- (三) 磯前順一『喪失とノスタルジア——近代日本の余白へ』みすず書房、二〇〇七年。
- (四) アルバール・メンミ著、菊地昌実・白井成雄訳『人種差別』法政大学出版局、一九九六年、一二七頁。
- (五) 安田浩一『ネットと愛国——在特会の闇を追いかけて』講談社、二〇一二年。

(立命館大学専門研究員)

知の共鳴

吉田麻子 著

江戸の豊穡な知性とコミュニケーションから生まれた平田篤胤の思想を、同時代のなかで読み解き、平田学派の書物をめぐる人々の様相、また書物そのものの動きを追う「書物の社会史」という視点から、史料をもつて描き出す。

〔主要目次〕

第一部

平田篤胤の常陸・下総訪問／越後の平田国学／気吹舎の著述出版構造／気吹舎における出版費用と門人たち／『稲生物怪録』の諸本と平田篤胤『稲生物怪録』の成立

第二部

国学者平田篤胤の著書とその広がり／平田篤胤『古今妖魅考』の出版事情／秋田の平田門人と書物・出版／幕末維新期の東信州と平田国学

第三部

平田国学の再評価と書物の社会史という視点／『鬼神新論』における人と神々

●A5判／四七二頁／七四〇円

11310033 東京都文京区本郷1-28-36

03(3814)8515

URL <http://www.perikansha.co.jp/>

へりかん社

*価格は税別です。